

# トイレットペーパー

尻始末 (紙) 物語

家庭紙史研究家  
関野 勉

はじめに

人類が誕生して二足歩行して以来、哺乳類で尻始末しているのは人間のみです。四足歩行の動物では、口と肛門が地上に対して平行で重力の影響が少ないので脱肛排便になっております。人間は二足歩行の立位になると、口と肛門が垂直になり重力が掛り肛門の筋肉を締めておかないと大変な事になるので、動物の様な脱肛排便が出来ないので始末が必要になったと考えられます。

尻始末用具のいろいろ

①指と水	インド・インドネシア	⑧ロープ	中国・アフリカ
②指と砂	サウジアラビア	⑨木片・竹へら	中国
③小石	エジプト	⑩樹皮	ネパール
④土坂	パキスタン	⑪海綿	地中海諸島
⑤葉っぱ	ソビエト	⑫布切れ	ブータン
⑥茎	日本・韓国	⑬海藻	日本
⑦とうもろこしの毛・芯	アメリカ	⑭紙	各国

「トイレットペーパーの文化誌・西岡秀雄著1987年論創社刊より」

他に、雪（北欧）、苔（ノルウェー）、棒切れ（ボルネオ）等も知られています。

そして、西岡先生は紙は地球上の3分の1の人達しか使っていないと述べておられるが、私は現在ではトイレットペーパーを世界で2600万t以上も生産して、65億人で割ると1人当たり4kgとなり、国・地域により紙を生産出来ない所もありますので、地球上の2分の1の人達が紙で尻始末しておると考えます。

又上記以外の尻始末用具はあると思われませんが、水洗トイレの普及もあり、一番持ち運びが楽で安い事もあり世界中に広まったと考えます。

紙の歴史とトイレットペーパー

紙は中国で紀元前に発明されており今から2150年も前の事です。記録は後漢書（蔡倫が105年に紙に文字を書ける様に改良）にあります。そしてわが国には、記録では「日本書紀」にあり610年に高麗の僧・曇徴が伝えたとありますが、実際には4～5世紀頃には伝わっていたと考えられております。

中国で発明された紙は、西はシルクロードを西漸して、カイロには900年、モロッコに1100年、ドイツ・イギリス・オランダ・とヨーロッパに広まったのは、わが国より遅れる

事約1000年でした。

紙が無かったヨーロッパでは書写材として、「粘土板」「パピルス」「羊皮紙」等が、使用されていましたが、中国からシルクロードを経て“紙”が伝わった事により、文化がイスラム圏で華を開きやがてキリスト圏に“紙”を通じて文化が伝達されて行きました。

中国で発明された“紙”には、書写・包む・拭く・加工等の用途がありますが、紙がトイレトペーパーとして使用された可能性の記録は、中国6世紀「顔氏家訓」の治家編にある「吾聖人の書読む毎に未だ嘗て肅敬してこれに対せずんばならず。その故紙に五経詞義及び賢達の姓名有らば、敢えて穢用せざるなり」（「顔氏家訓」宇野精一訳より）とあり、ここに出てくる“穢用”の意味ですが（鼻紙）と訳されていますが、尻始末にも使用された可能性があり、これが紙をトイレトペーパーとして使用した記録の世界で一番古いものと思われま

す。我国には4～5世紀頃に伝わった紙がトイレトペーパーとして使用したと思われる時代は、12世紀の絵巻「餓鬼草紙」に描かれた絵に、土壁の前で排便している“伺便餓鬼”の場面に<sup>ちゅうぎ</sup>籌木（糞篋）と紙が散らばって描かれており、絵巻には詞書きがありませんので推測するしかないのですが、12世紀頃には既に上流階級の者は紙を尻始末に使用した可能性があります。そして日記「長秋紀」の1119年10月21日の条に「……其東間為御樋殿有大壺紙置台等」とあります、御樋殿とは室内トイレの事で、大壺はオマル（御虎子）の事です、そして「大壺紙」とは今の“トイレトペーパー”と言う事になります。

又仏教書「正法眼蔵」（道元著・13世紀）の洗浄の条に、

「病後使籌、又は使紙」とあります。

ここで、“病”とはトイレの事です。トイレの後で籌（糞篋）を使う又は紙でとなりますが、いくらお寺でも紙が自由に使用出来るのは高僧ではないかと思われま

す。以上の記録から、中国では6世紀頃に、我国では12～13世紀頃には既に上流階級の者は紙を尻始末に使用していた事は明らかで、「大壺紙」は手漉紙ですが紙質は分かりませんが漉返紙と思われま

す。その頃ヨーロッパでは尻始末の記録は、16世紀のフランソワ・ラブレーの「ガルガンチュワ物語」に「尻を拭く妙法を考え出したガルガンチュワの優れた頭の働きをグラングージェが認めたこと」なる一章にある次の言葉です。

「お尻を拭くのに最も具合のよい、おしりの拭き方を発明しましたよ。ガルガンチュワが自慢して、色々の道具を披瀝します、中略 羊毛・紙でも拭いてみました。」

「かみなどできたなきしりをふくやつは、いつもふぐりにかすをのこすなり」

（渡辺一夫著・岩波文庫より）

他にドイツの17世紀の「阿保物語」（望月市恵訳・岩波文庫）にトイレトペーパーなる言葉が出てまいります、いずれにしても16～17世紀頃にヨーロッパで紙が漸く普及し

てきましたが、原料問題（当時は布ボロ切れが不足）が絡み、木材パルプが登場する前でしたので、紙は未だ庶民が潤沢に使用出来る状態にはなかったと思われまます。この頃にはイギリスでは水洗トイレの開発が進められていました。

### トイレットロールの誕生

18世紀迄のヨーロッパの紙の原料はボロ布でしたので、人口増に対応出来ず社会問題でした。1719年フランスの科学者レオミュールはスズメバチが、腐った木材から巣を作っているのを見て、木材から紙が出来るであろうとの論文を提出しました。それから100年以上もたってから、ドイツのケラーが1844年に木材をすりおろしてパルプを作る機械の特許を得て、紙が木材から出来る事を証明して材料革命となりました。

当時の紙は手漉でした。中国・日本等は毛筆用ですが、ヨーロッパはペン書き用の用紙が主で少し厚めのものが多く、日本の様に厚薄の種類沢山ある紙は少なく、今の家庭紙の様な紙は無かったと思われまます。そして手漉ですから数量には限りがありました。

洋紙と言われる機械抄き紙が生産される様になったのは、フランスのルイ・ロベールが1798年に抄紙機を発明してからの事です。しかも当初の原料は古着でしたので、手漉に比して機械抄紙の場合は原料が大量に必要なので、原料である古着が足りなくなり社会問題になりました。その後麦藁、麻等を利用して機械製紙を行っている内に、先程書いた1844年に木材がパルプとして利用出来る事が分かり、それに加えて、製紙用の色々の薬品の発見とが相俟って紙の増産が出来る様になってきました。

機械製紙が世界に広まる事により、色々の種類の紙の生産も行われてまいりました。ちり紙状の紙は日本では12～13世紀頃より、アメリカでも1857年にゲイティが生産したと記録にあります。ロール状のトイレットロールの基本特許とも言うべきものは、1871年アメリカのセス・ウィラーの (No.117,355) WRAPPING PAPERS と思われまますが、最近分かった事です、イギリスで1863年F. Feichtinger なる人物が特許をとったとの記録を見つけましたが、特許番号が分からず内容が分かりませんのでちり紙状なのかロール状なのか判断出来ません。セス・ウィラーの特許はラッピングペーパーなる題名ですが、見た目にはトイレットロールの大型の物で小さくすればトイレットロールになります、そしてセス・ウィラーはアメリカ・イギリスのトイレットロールホルダーの特許に沢山関わっています。

そして、1885年にはWRAPPING AND TOILET PAPER なる題の特許 (No.333,183)もとってまます、その後も沢山の特許をとっている事は確認して居まます。

1871年の特許で実際に製品（トイレットロール）が生産された記録は見つかりませんが、その後1879年アメリカのScott paper Co, が、1880年にイギリスのW. J. ALCOCKが企業化しています。イギリス・アメリカのどちらが早かったのか迄は日時を特定出来ませんが、トイレットロールが誕生しました。しかし、欧米では19世紀末に誕生したトイレットペーパーの購入はとても恥ずかしい事だったと旧スコットペーパーのパンフレットにあります。

それは日本でも“臭いものには蓋”で、欧米でも同じです。

#### 日本におけるトイレットペーパー

日本には“ちり紙”なる種類の紙が手漉紙の頃から、各地で生産され奈良・京等では吉野紙等の薄紙が塵紙として上流階級には使用されていました。江戸庶民は漉返し紙の代表である“浅草紙”を使用していました。他でも各地で漉返し紙はご当地銘を付して生産・販売されていました。それが昭和48年のオイルショックの頃迄続きました。

日本に“トイレットペーパー”なる言葉が伝わり初めて新聞の広告に載ったのが明治32年の「中央日報」の広告ですが、明治45年徳島県の志摩なる人物が実用新案（No.24,049）にて「便所巻紙」なる題で収得していますが、この実用新案で生産された記録は見つけれませんが、又この実用新案で生産する為の生産機械が果たして日本にあったのか、それ以前に紙管は当時は手巻きで作らなければならず、まして便所巻紙に記されている“ミシン目”を付す機械も問題です。が明治43年7月5日の「紙業雑誌」5巻5号には、新橋から下関行の列車に乗った著者が、客車の便所にて「支那製の下等竹紙を継合わせて小さな小巻取りにして設置されていた」と記録しています。巻き取りして継いであると言う所が問題で、“トイレットワインダー”要するに、小巻にしてミシン目を入れて切断する機械がないから、手作りをした製品を列車に設置していた事になります。国鉄時代の社史を編集した方やJRになった後、トイレに関係していた方にも尋ねましたが、当時の便所で紙の設置等の状況は全く記録されて居ませんでした。昭和48年のオイルショック時迄“トイレットペーパー”は庶民は全く関心が無かったといってもいいと思います。それだけ日本は紙が豊富でした。

これ以前“日露戦争時の三笠艦”は、明治32年イギリスで作られたので、洋風呂・洋便器が設置されていたので、横須賀の三笠艦を尋ねて聞きましたが、紙は何を使用したのか迄は記録が無いと言われました。東京駅前の三菱レンガ街のビル、日銀本店旧館・帝国ホテル旧館等は水洗トイレが設置されていた筈なのですが、トイレットペーパーは何を使用していたのかの記録が見つかりません。

日本での“トイレットロール”の生産記録は、

「大正13年（1924年）土佐紙会社・芸防工場で神戸の島村商会の注文で原紙を抄き、島村商会が加工して外国航路の汽船に積んだ。とあります。」（芸防抄紙物語所収）

しかしどんな機械で巻き、ミシン目を入れたのか又カット等の加工状況は分かりません。手漉紙から機械抄紙になり幅の制約はあるものの、長さについては無制限になりロール状の製品は出来る様になりました。問題は加工機です。その加工機の資料は今の所見つかっておりません。その後何社かは戦後迄生産していた記録があります、そして生産記録の統計は昭和17年以降からです。

戦前のトイレットロールの現物は、「文化柱」という“新聞の新聞社”が1940年（昭和15年）に収集されて、タイムカプセルにして長野県茅野市に地上に建っているものです。

この中に「天狗」銘のトイレットロールが入っています。そして2040年に開庫される予定になっています。残念ながら私は生きて居られないでしょう。見る事が適わない筈です。見る事が出来たならどんな紙質なのか、他の事も含めて現状の物と比較して見て下さい。

昭和36年以降アメリカ・キンバリー・クラーク社とスコットペーパー社が相次いで日本の会社と合弁会社を設立して、チリ紙はトイレットロールに、京花紙はティッシュペーパーに転換させられて行きました。それは合弁会社の特許や生産技術が勝ったものの、日本人の木目の細かさで、手漉和紙の風合いを生かした加工技術で圧倒して、日本では利益を上げられずに資本を引上げ撤退してしまいました。現在はブランドのみ残っています。

1973年（昭和48年）のオイルショック時の、トイレットペーパーの生産量は「ちり紙」が29万t、ロールが19万tと合計でも50万t弱でした、これが逆転するのは、昭和53年の事です、原紙があっても加工機が無く加工出来なかったのです。現在は“ちり紙”は年間1～2千tで、トイレットロールが100万tの生産量となっており、パニック時の倍になってはいますが、人口減と輸入品が増加してきておるのが現実です。

おわりに（後始（紙）末）

紙は文化のパロメーターと言われた時代もありました。トイレットペーパーは世界中で現在2600万tの生産で65億人として1人当たり4kg/年になります、ですから地球上の半分の人々が紙を使用している事になります。これ以上使用人口が増えると、何処かで原料問題が出てくると思われます。

日本人は100万tの生産で1人当たり年間8.04kgの使用量となっております。そして、パルプロールが40%、古紙ロールが60%程度の割合となっております。

アメリカで1871年に紙をロール状にする特許がとられて、その後応用品としての“トイレットロール”が、1879年1880年頃に製品化されてからトイレットペーパーの歴史は、紙の歴史・トイレの歴史の中にも、尻始末の詳しい事は出てこないで30年近く調べてはいますが、この程度の事しか分かりません。それでも最近アメリカの19世紀・20世紀初め頃のトイレットペーパー関連製品やカタログ等が骨董市で手に入れる事が出来、その製品に記されてデーターから特許番号等が分かる様になりました。しかし、トイレットロールに刻まれた“ミシン目”に関する特許番号は今以て分からずじまいです。それは1840年頃に切手に穿孔・ルーレットどちらかの方式でミシン目を入れる方法が既に知られていたもので、ミシン目の入れ方の特許は、小切手帳等、製品によりミシン目の入れ方が違うので、どの特許がトイレットロールのミシン目を入れるのに適していたか、又は既存の機械を加工して利用したのか、見定めが出来ずにあります。これからも資料の収集を続けて解明に努力します。

了